



若い職人たちは学生時代に書道や美術修復を学び、表具師の道を志して入社したという

表具師

稲崎昌仁

古代より重要な役割を担ってきた表具師。先人の技と心を受け継ぎ、日本文化を静かに支え続けている。

日本のあらゆる文化を下支えする



上/昌仁さん愛用の道具。刃物だけでも何種類もある 下/刃の角度を決めたら、迷いなく引く

技術の高みを極め、空間を演出する

取材に訪れた日、経新堂稲崎表具店の二階では三人の職人が作業台に向かっていた。最も大きな台の前に座るのは、五代目の稲崎棟史さんの次男・昌仁さん。記者がその台にメモ帳を置いた時、視線を感じて非礼を詫言ると、昌仁さんは静かに口を開いた。「この台のことを私たちは『御板』と敬称をつけて呼んでいます。お寺からお預かりした物を置いたり、正月には三方を置いてお供えしたりする神聖な場所なんです」。話を続けている間も二人の若い職人は黙々と手を動かしていた。

この道に進んだのは、二〇代半ばの頃。兄の知伸さんと同じく、学生



「仕事で大事なものは、正直であること。精良な紙を使い、持てる技術をすべて注ぎ込むことです」

の頃から父の仕事を手伝っていたが、大学卒業後は自動車メーカーに開発エンジニアとして就職した。「当時は大組織の中で働いても自分の成果が見えにくく、年功序列の仕組みの中では努力が報われないと感じていました。そんな折、海外転勤の話が持ち上がり、それを機に退職して家業に入ることにしたので」と話す。

知伸さんが店の経営や地域活動を担う一方で、昌仁さんは技術の研鑽に力を注いだ。父や先輩職人から学ぶだけでなく、表具師の協会に

も積極的に参加して、業界の熟練者からも教えを受けた。昌仁さんの「技術を高めたい」という想いと努力は作品の仕上がりに表れ、稲崎表具店には名だたる博物館や寺社からの依頼が多数寄せられている。

現在、昌仁さんが主に手掛けているのは掛け軸を中心に、屏風や額、衝立などの修復。周囲の表装だけでなく、書画そのものの修復も行っている。父・棟史さんの代にも一部は行われていたが、昌仁さんの代になってからは一貫してすべての修復を請け負うようになった。「奈良時代や平安時代の古い書画が今も残っているのは、裏打ち紙を数百年に一度打ち替えることで保存されてきたからです。それを担うのが私たち表具師の仕事。律令制が始まった時から続く仕事で、経巻や

書画を仕立ててきました。日本の政治、宗教、美術、出版、あらゆる文化を下支えしてきた仕事なのです」と語る。

経新堂稲崎表具店が掲げる『江戸表具』は、その名のとおり江戸の町で育まれた表具だ。「京都では表具師と経師が分業されていますが、東京では両方をこなして一人前とされます。京の公家文化とは異なり、町人や武家の文化が基盤にあるため、華美にみならず、書画よりも表具が前に出ることがありません。表具には真・行・草（※）の格式があり、『この部屋にはこの格を』と提案するのも私たちの役割。いわば空間のプロデューサーでもあるのです」と語る。店の屋台骨を支える昌仁さんの仕事は、もはや自店の枠を超え、日本文化そのものを支えていると言えるだろう。

※茶道や華道、建築、絵画、作法など、日本の様々な分野で用いられる美意識の概念。「真」が正式で厳格な基本形、「行」はその中間、「草」が自由で風雅な略式

いなざきまさひと ● 1969年生まれ。経新堂稲崎表具店5代目の次男。2021年、東京都伝統工芸士に認定。2025年、一般社団法人伝統的工芸品産業振興協会の伝統工芸士に認定。

東京都中央区日本橋浜町 2-48-7